

正木 譲 まさき ゆずる

(琉球政府気象庁)

1934 年(昭和 9 年) 石垣島石垣町に生まれる。81 歳(2015 年時点)。

父正木任は 1940 年、農林省南西諸島資源調査団の一員として尖閣諸島を調査する。早世した父の遺志を継ぎ気象業務の道に入る。石垣島測候所、与那国島測候所勤務を経て、八重山气象台観測係長、与那国島測候所長となる。1972 年復帰後は、石垣島地地方气象台予報官、沖縄气象台観測課長、那覇航空測候所長、南大東島气象台長を歴任する。氏も父と同様に尖閣諸島に関わった。尖閣調査の思いでと併せて、気象歴 45 年の中でとくに印象深かったという与那国測候所時代の体験を語ってもらった。



昭和 14 年 農林省調査に同行 尖閣 5 島調査

— 高良鉄夫先生は 1950 年に戦後初の尖閣調査をなさった。お父さんの「尖閣群島を探る」の論文を読んで、情熱を燃やして行かれた。これは正木さんのお蔭と仰ってましたが。

正木: 父は昭和 14 年、農林省資源調査団と一緒に尖閣に調査に行った。あれはグアノがあるかどうかの調査だった。小林純さんという技官なんかと一緒にいった。僕はあとで分かったけど。その調査に便乗したわけです。だから許可したのは当時は大和順一所長か、昭和 14 年だから、その前の喜田豊一所長だったかなあ。尖閣列島の調査に行って、「採集と飼育」という雑誌に書いたのが「尖閣群島を探る」(1941 年 4 月号)です。

それに私が国民学校 2 年生の時に、父は亡くなっていたので、尖閣列島の話を知ったことはなかった。ただ、父の書斎には尖閣から採ってきた昆虫などの標本も沢山ありました。写真も、幾つかの鳥の剥製がありました。カツオドリとか、セグロアジサシとかはよく憶えています。論文見るとクロアシアホウドリの剥製が写っているが、それは全く記憶にない。その頃は北小島に生息していたわけです。あの中に北小島でセグロアジサシが乱舞し、帽子被った人が竿を持って鳥を叩き落としている写真があります。この人の話を聞いたことが



北小島のセグロアジサシの乱舞。竿一振りすると 2,3 羽落ちた。竿で自分が叩いた。これが自分だと話していた。

ある。調査から帰ってきた時かなあ？ こっちは鳥が沢山おって、竿で自分が叩いたよ。これが自分だ。竿を一振すると 2、3 羽は落ちたと言いました。この人の名前は忘れてしまった(笑い)。もう空一面セグロアジサシの大群ですねえ。

高良先生もこの写真を見て、尖閣列島に情熱を燃やされたんでしょう。私もこの写真を見る度に行ってみたいと思ってました。昭和 43 年ですか、私も伊志嶺安進さんと一緒に、尖

閣の海洋調査に行きました。高良先生と一緒に南小島に上陸しましたが、先生は海鳥がだいぶ少なくなっていると嘆いておられました。

天然記念物指定し 海鳥保護を 貝新種 3 種 発見

父は「僅か 2 週間の採集にて、陸産貝類の新種 3 種を発見した・・・昆虫類その他にも新しきものの発見されることを期待してゐる。魚釣島の原生林の保護、北小島でセグロアジサシの大群、黄尾嶼の鯉鳥及び水風鳥等の濫獲の取締り等は緊急必要なことで、セグロアジサシの繁殖地として天然記念物の指定をなし、北小島への上陸禁止措置をやつて欲しいと思はれる」（「尖閣群島を探る」）と書いてます。高良先生も同じことを書かれていますよ。

台湾漁船がヒナ、卵を濫獲して、このまま放置すれば、尖閣の海鳥は滅びてしまうと警告されています。父達が行った昭和 14 年頃は太陽の光は遮られて、空がかき曇る位ものすごい数ですからねえ。別の写真に無数のセグロアジサシが地上で抱卵しているのがあります。「鳥は全部風の吹いてくる方向に向いている」と説明していますが、この簡単な文に、父の自然観察の眼を感じましたねえ。きっとこのような観察眼は、父の上司だった岩崎卓爾所長の影響だったと思います。

父達は、魚釣島と久場島で陸産貝の新種 3 つ、多田武一さんがアツマイマイとタダマイマイ。父がマサキベツコウマイマイを発見してます。高良先生も、魚釣島と南小島で、タカラミノギセルとセンカクコギセルの 2 つを発見してます。



前列：クバの葉を与那国から魚釣島に採取にきた人達。
後列左：古賀商店支配人多田武一氏、右：正木任

岩崎卓爾 尖閣調査 立役者かも

— お父さんは岩崎卓爾の愛弟子と言われています。高良先生も子供の頃は、天文屋の岩崎さんから尖閣の話を聞いたりして、八重山の自然だけではなく、尖閣の自然のすばらしさも教わったと仰ってました。岩崎さんは尖閣調査の立役者かもしれませんねえ。

正木：尖閣のことはよく分らんが、八重山の自然の調査研究の先駆者、功労者です。

イワサキゼミ、イワサキクサゼミ、イワサキシロチョウ、イワサキハブとか、イワサキが冠した昆虫は 10 種類、ハブは 2 種類もありますから。八重山の自然の調査研究が今日のように進展したのは岩崎さんのお蔭です。尖閣の調査研究にも貢献したかもしれん。

高良先生は話してました。先生が八重山に来た時は小学 2 年だったから、何も知らなかった。ヤギの草刈りや薪取りが日課で、それで山に行ったら岩崎さんに出会う。出会うと八

重山の自然のすばらしさ、尖閣のことをいろいろ教えてもらったわけです。

そしたら海の向こうに海鳥の樂園があって、無数の鳥が乱舞している。これが古賀の無人島という島だと（笑い）。

高良先生はこの話を岩崎さんから聞いて、イメージを逞しくして、いつかは行ってみたいと思ったんでしょう。時々草刈、薪取りしている時手を休めて、この島はどこにあるかと探したわけです。名蔵原頭に立って、はるか沖を見たら、西表の北の方にかすかに小島が見えた。鳩間島ですよ。先生はあれをずっと古賀の無人島と思っていたらしい（笑い）。

それを岩崎さんに、尖閣列島は、東シナ海にある絶海の孤島だと教えられた。どんな島で、そこにはどういった自然、生き物がいるかをいろいろと教わったはずですよ。

僕の父も、岩崎さんから、教えを受けて、自然に対する研究姿勢とか、観察眼とか、相当影響されました。愛弟子と言われる位愛がられたようです。父もマサキウラナミジャノメとか、マサキが冠した昆虫4種類を発見しています。

岩崎さんは昭和12年68歳で亡くなりました。僕が3歳の頃ですから覚えていません。昭和7年に63歳で測候所を退職しましたが、その頃はもうお年ですから、山野を跋涉したりはなかなかできんです、離島に行ったりも。それで皆岩崎さんを訪ねて来る学者、そういう人達を、父は皆を案内しているうちに非常にいい勉強になったんでしょうねえ。お蔭で江崎梯三先生とか、安松京三先生とか、もう世界的な生物学者ですよ。そういう人達と交わることができたわけです。



八重山測候所の正門玄関に立つ岩崎卓爾

戦時中 中央气象台 尖閣へ 測候所設置 計画

— 話はいきなり飛びますが、昭和18年頃ですか、中央气象台は、尖閣諸島に測候所設置を計画して、石垣島測候所に、軍事極秘で、尖閣調査を依頼しますねえ。

正木：僕はその頃7歳ですから、そのこと何も知らんです（笑い）。20歳で測候所に入ってから、この戦時中の話を記録文書見て知った。書類がこんなに沢山綴られている。

軍事機密資料だから、戦局が逼迫してくると、中央气象台とのやり取りも暗号電報になりますねえ。これ幾つかコピーしたのがあります。（そのコピーを持ってくる）

その時は父は行ってない。東京の高等講習に行って、気象技術官養成所(現気象大学校)の講習ですよ。で、帰りは門司から台湾廻りで帰る途中に、与那国沖で潜水艦にやられて亡くなっています。昭和18年3月に。そのあとだから、この件は内川規一さんが中心だったはずですよ。内川さんは、復帰後の沖縄気象台の初代台長やった人です。この方が東京の中央気

象台（現気象庁）から派遣されて、石垣島測候所に来た。台長は有名な藤原咲平博士で、あの新田次郎の叔父さんです。

これが尖閣群島調査報告書(第一号)です。大和順一所長名になっているが、書いたのは内川さんです。古賀商店の古賀善次さん、伊地柴賛さんから話を聞いて、あとは黒岩恒の「尖閣列島探検記」とか、父の「尖閣群島を探る」を引用して書いてます。

最初に「位置」「由来」があって「停泊設地状況」を書いて。これ見ると尖閣は潮が速くて、波が荒いし、ちゃんとした港がない。台風が来たら、船を陸揚げせんといかん、港の問題、シケになった時や台風時の問題があるから、魚釣島の掘割を、報告書では船着場と書いている。ここを改修して使うとか、また船着場の奥にあった巻揚げ機の施設、あれは長い間使っていないからどうなってるか。「・・・放置すること久しく崩壊せるも有り」と想像さる」と心配している（笑い）。

また「毒性動物の棲息状況」と「地形地質状況」もしっかり書いている。「既設施設」に写真を添えているが、この写真はないけど、「同船着場の近くに古賀商店の作業場あり、右は暴風に備へ高さ約3米、幅2米、長さ120米に達する長大なる石垣積の防風壁中にあり」とあるから、あの古賀村の写真だと思いますねえ。また「同所には更に角石積貯水槽2箇あり飲料水は豊富」とある。この貯水槽の写真は、父が「尖閣群島を探る」に写真を載せてある水槽ですねえ。



尖閣群島調査報告書(第一号)。当時の情勢下では測候所建設は軍事極秘扱い。

魚釣島 山頂 362 メーターと山麓 黄尾嶼 116 メーターに

— 測候所建設候補地として、やっぱり魚釣島が候補に挙がったわけですか？

正木：候補地として、魚釣島と黄尾嶼（久場島）の2つを上げていますねえ。「測候所建設候補地ニ対スル考察」にはこうあります。「島ニ測候所建設スル際ニ於テハ航空路ヲ全般ニ視察シ得ル地点トシテ標高三六二ヲ中心トスルー帯ヲ挙ゲ得ラル」と、そして「標高三六二視界ハ四面何方モ遮ル物ナキ点ヨリ考察シ雲霧ニ遮ラルル以外ノ場合ハ良好ナル観測結果ヲ得可キ事ヨリ工事 易経費多過ニ係ラズ測候所施設ノ要アリト信



魚釣島の最高峰奈良原岳(362 メーター)が候補地。航空気象データーを得るには最適地とされた。(多和田真淳 1952)

ンズ、但シ山頂ニ於テ雲霧ニ其ノ視界遮ゲラレタル場合ノ補助観測所トシテ山麓タル船ノ発着場附近ニ若干ノ施設ヲ行フ要アルベシ」と考えて、魚釣島の山頂、あの奈良原岳の山頂を候補地に挙げています。だけどやっぱり雲霧に閉ざされる心配したんでしょう。

黄尾嶼の一番高い所は 116 メーターはあるから、そこは雲霧に閉ざされる恐れない。そこは「四面何方モ遮ル物ナキ点ヨリ考察シ航空気象上良好ナル観測結果ヲ得可キ事期待サル」として、候補地に挙げてます。それから見ると、尖閣は台湾航路の要衝にあたるから、航空気象のデーターを採るために測候所建設は必要だったわけですねえ。

敵性艦隊出沒 山砲設置し 四方砲撃し得ること

— 中央気象台長の藤原咲平。あの人は豪胆な人だったんですねえ。莫大な金が掛かる上、食料の補給とか維持を考えれば大変だが、これを承知で建設計画したわけですから。

正木：藤原咲平台長はほんとすごい人ですよ。建設費用も莫大なものだし、それに食料の補給も大変です。防波堤も、300 ト級の船が入る港も造らんといかんとある（笑い）。

魚釣島の場合だと、山頂測候所と山麓観測所を造り、耐震耐風のある鉄筋コンクリート造りとする。この観測所の他、「合宿所建設 食堂、厨房、等ヲ建設シ適当ナル渡廊下ヲ以テ連結スルヲ要ス」。また「舎ニハ晴雨計室、事務室、図書室、調査室、所長兼応接室、工作室、器械室、化学分析室、便所等ヲ必要トシ重油倉庫ハ地下室的ニ築造スルヲ要ス」とある（笑い）。こんな観測所ができたらすごいよ。

その他に「山頂、山麓間道路、電話開設」「電信設備」も計画しているから、ほんとすごい（笑い）。もう人間も、所長、主任、観測員、通信士、雑役人夫、全部入れて、これ何名かなあ、15 名から 20 名は要る。これの食料補給も大事だ。米、味噌、缶詰とかは輸送して、「野菜果物等ハ現地適当ナル地域ヲ開墾シ雑役夫ヲシテ栽培セシム、魚類ハ雑役夫等ヲシテ漁セシム」。

それに戦時中だから、武装もせんといかんとある。「敵性艦船出沒スル事アルヲ以テ次ノ武装行ヲヒ万全ヲ期スル必要アリ」として「1、山砲又ハ機関砲 屋上ニ設置シ四方砲撃シ得ル ニスル事必要ナリ、2、重機関銃ニケヲ 山頂ニ設置スル必要アリ、3、軽機関銃 一ケヲ 山麓ニ設置スル必要アリ、4、小銃 勤務人員全員ニ亘ル必要トス、但シ右ハ軍部人員派遣アル場合ハ其必要ナシ」。これは、ほんとに壮大かつ豪胆な計画だ。さすが藤原台長だよ（笑い）。



中央気象台、左上：尖閣諸島測候所建設に熱心だった藤原咲平台長

戦況逼迫 資材も止まり 計画 立ち消え

— 現地調査はどうなったわけですか。

正木：これ調査予定の9月頃から暗号に変わっている。調査人員、調査区域、日程も決まり、海軍艦艇の島来丸かなあ、これに便乗して出発を待つだけだったんです。内川さんが行きます。石垣測候所からは大和順一所長と外間永起さんが行ったはずですよ。

大和所長は陸軍上がりでシナ事変の戦車隊の隊長だったとか、やっぱり気象官養成所本科出ではあるんですが。また外間さんは水産学校出で、船に強かった。奥さんは測候所の同僚でした。僕はよく可愛がってもらったです。これが9月29日の帰任報告です。魚釣島だけ調査してます。こうあります

「全島山岳にして特に山頂は巨岩累積し且つ両側共に切り立って大規模の爆破を行うに非ざれば建築用地を得られず」「風向風速は地形の影響甚しく？

視界等、観測は雲霧の為は支障甚しき？見込みなり、該地に建設は却て良好・・・」。欄外に「多数の費用を要する割に観測結果良好ならず」と書いてある。この久場島は天気悪くて、上陸できなくて、「今後適當の機会まで」とある。護衛する海軍掃海艇の都合で延び延びになって、結局12月ですねえ。12月になると冬の海は荒い、北風が強くなります。12月2日の電文には、「もはや当地方一帯季節風の卓越する期間と相成り、明春の期間まで実施すること困難」となった。昭和19年1月8日には、中央气象台藤原咲平台長から「その重要性に鑑み極力努力仕候も時局下資材を要する新規事項は全般に互り不可能な状況にありて本件も明年度予算不成立上相成致処今後魚釣島方面気象機関要は益々重大と相成べく本台としても明後年に於いて之が予算獲得に努力致す予定に有之候に付き右御含みの上一応現地調査を打切と致され度此段及回答候也」とあります。そのあと那覇は10.10空襲でしょう。尖閣列島の測候所の設置計画は戦争で立ち消えたわけです。



魚釣島調査帰任報告
暗号電報

終戦直後 設置計画 再燃 比嘉所長 意欲燃やす

— 戦時中のこの計画は、戦争で消えて失くなったわけですねえ。でも、戦後再び、終戦直後の早い時期に、比嘉正雄所長によって計画されるわけですねえ。正木さんは高校の地学の授業で比嘉所長からしょっちゅうこの話聞かされたそうですが。

正木：そうでしたよ（笑い）。比嘉さんは青島の所長やっておったです。東京に引き揚げてきて、すぐ比嘉さんは、石垣の所長を命令されるから家族皆連れて、昭和21年八重山に来たんです。そして、昭和28年まで7年間所長されてました。石垣島測候所に来たら、戦

争中の測候所造ろうというこの計画書があったでしょう。「・・・今後魚釣島方面気象機関要は益々重大と相成べく本台としても明後年に於いて之が予算獲得に努力致す予定に有之候に付き右御含み・・・」とあるでしょう。ああこれぜひやるべきだ。やっぱり台湾坊主の発生、これが分からんとどうにもならない。で、それを推し進めるわけです。

比嘉所長は八重山高校で地学教えていたんですよ。あの頃は理科の先生が少ないもんだから教えに来ていた。そしたら、尖閣に測候所造るというしょっちゅうその話ばかり（笑い）。1 学期間、全然気象の話しないですよ。気象の話しないで、尖閣のこの話ばかりやってねえ（笑い）。尖閣には何で必要かという話をやったり、そういうことで1 学期は終わった。比嘉所長は、尖閣に測候所ができたなら、その時に幾らでも人間必要だと（笑い）。僕ら 15 名足らずの受講生しかいない。お前ら 15 名全員採用する！ だから大学なんか、行く必要ないから、測候所が皆採用する！と（笑い）。2 学期からは鹿児島に転勤して、城間宏周さんという次の所長が来たんです。

君達 全員採用！ 海賊船押し寄せる 武装も必要だ！

そして、血気盛んな頃でしょう。あそこ海賊がいるから、海賊が押し寄せてくるかもしれないから、海賊とも闘わんともいかんから、やっぱり武装も必要だ、機関銃も（笑い）。

当時の新聞にこうあります。「再びせん角列島へ 昨夜武装警備艇出港 密貿易や海賊船の根城として 風聞乱れ飛ぶせん角列島は、先に久手堅次席ら武装警官が同島に調査に乗り出したが。悪天候のため西表沖付近から引き返したことは既報したが、その後警戒の目をゆるめず二月風廻りの通過の時季を待機していたが、昨夜夕刻五時頃、神山司法主任、玉城刑事部長以下腕利きの警官九名が武装、あかつき警備艇で再び同島へ向け出港した。予定は一週間・・・」（八重山毎日新聞 1953.4.9）とある。

あの当時は密貿易が盛んで、非常に物騒な時代ですよ。尖閣も密貿易や海賊船の根城が何かになって、物騒ない所と考えていたんでしょう。尖閣に測候所を造るんだったら、魚釣島の山頂にも造らんといかんし、下にも造る。武装もして、機関銃も何丁も置かんといかん、海賊が押し寄せて来たら、闘って撃退させんといかんから（笑い）。この比嘉先生は豪胆で、話上手だったですよ。



当時の八重山高校、右上は比嘉正雄所長。地学の気象の時間は、もっぱら尖閣の測候所設置の話ばかり。

— すごいですねえ、その話を聞いて、皆どんな感じでしたか、

正木：もう、そこで観測をしてねえ、やれるとこんなに、これに越したことはない、給料も普通の倍くれるというから（笑い）。しかし、その中で、話の中に、所謂低気圧とは、

前線とはこういうものだとか、そういう話をして、海流というのがこう流れてくる。黒潮というのが流れている、そこに北風が吹いてくると、そこに三角波が立ちやすいとか。ああいう気象学の話が、説明が、この話の中に出てくる。興味を引きつけながら、もうそこに気象学の講義も入っているわけですよ。いやもう面白かったです（笑い）。

そしたら、学期の終わりになって、試験と、教科書全然開かない。僕が話したのは教科書の何ページから何ページの間、そこを読めば分かるから、書いてあるはずだから、確認してと、試験問題は 10 問題書いて、10 問題、気温とか、湿度についてとか、ああいうものを書いて、これの中から 5 問出すから、憶えておけと。大学並みでしたよ（笑い）。

比嘉所長は、尖閣に測候所造らなければならない意義はやっぱり台湾坊主です。台湾坊主の発生を一刻も早く捉まえる必要があるわけです。今でも東京に雪を降らせるのは台湾坊主です。この南西諸島、とくに尖閣列島辺りは、日本列島の天気を左右する重要な要素になるわけです。台湾坊主は夏はできない、秋から。(天気図を指しながら) 雲が大陸の方にできて、これが東シナ海にできたら、間違いなく、台湾坊主ですよ。所謂 2 月カジマヤもこれによるんです。ここに西に低気圧ができると、今日はここにできると、明日は発達してここに行って、明後日はもう爆弾低気圧です。こんなに発達する。そうすると関東は大雪、南岸低気圧といいますから、ああいう風に変な発達、急激に発達する。今は人工衛星ですぐ分りますが、あの当時は分らない。魚釣島には国際気象番号がありましたよ。確か九州が 800 番台で、南西諸島は 900 番台、名瀬が 909、那覇が 931、宮古 927 石垣 918、魚釣島 916。気象観測地点として重要な場所だからです。だから、比嘉所長は尖閣に測候所を造って、一刻も早く発生を捉まえる必要があったわけです。



当時の気象チャート。魚釣島は国際気象番号 916。

台風の前哨地点 魚釣とラサ島に測候所 軍が計画

— 当時の新聞に、「台風の前哨地点 魚釣とラサ島に測候所 軍が計画」（琉球新報 1953.03.20）とあります。米軍も気象観測地点として重要な場所だからと魚釣島に測候所設置を計画したわけですねえ。それと比嘉所長の計画との関係はどうですか。

正木：よく分かりませんねえ。比嘉所長は昭和 21 年に八重山に来て、戦時中の計画書を見て、早い時期から造るべきだと考えていたんじゃないか。米軍の計画が出たのは昭和 28 年でしょう。その年は鹿児島に転勤します。僕らが地学の時間にその話を聞いたのはその年の昭和 28 年 1,2 学期でした。その話を聞いたのは僕らが最後の学年だったかもしれない。米軍の魚釣島とラサ島に測候所設置の計画ですが、琉球气象台具志幸孝台長は、この 2 島

とも遠く離れた島で、しかも無人島だし、庁舎の建設、職員の派遣とか、物資補給は大変だろう、優先すべきことが他に多くあるからと、反対であつたらしい。結局、予算がないということでこの計画は頓挫するわけです。琉球气象台百年誌の資料編かなあ、その辺のことは少し載っていたと思う。それと、戦時中、与那国にも測候所造る計画があつたんです。比嘉所長はこれもぜひ造るべきだとして、具志台長と一緒に与那国に視察に行っている。与那国の町民も喜んで、建設用地は無償で提供したいと、島挙げて歓迎してますねえ。この記事が昭和 27 年 9 月の八重山毎日新聞にありますよ。琉球政府は金がないわけだから、その時の計画もダメになった。それができるのはずっとあとです。西表が優先されて、昭和 29 年に西表測候所が造られます。与那国測候所ができたのが昭和 31 年、比嘉所長が与那国視察に行った 6 年後です。



(琉球新報 1953.03.20)

それにしても具志台長も大変だったはずですよ。琉球政府は金がないもんだから、どこを優先してやるか、相当苦労されたはずですよ (笑い)。

比嘉所長 中央气象台管轄下で建設 目論見外れる？

— どう考えても、琉球政府は金がないのに、尖閣に測候所造るんだ。君達 15 名の生徒雇う、全員雇うと、比嘉所長が言ったのは、何か、考えがあつたんですか？

正木：それを言うには当時の状況が分らんといかん。戦争終わって沖縄はアメリカの統治下に入るけど、この気象事業だけは、GHQは、昭和 21 年に日本政府に対して石垣、宮古、名瀬、南大東島の 4 箇所の測候所を継続して維持運営するように指示したわけです。

それで中央气象台は、年に 4、5 回船を回航させて、観測機器の補給整備をしたり、人や給料なども運んでいました。あの頃は、測候所の給料は、日本円でもらえるから、八重山支庁長よりも、石垣の町長よりも、ずっと小使いさんの方が給料が多くて、職員は皆羽振りがよかったです。いまでも語り草になっていますよ (笑い)。結局、沖縄の気象事業は歪な 2 重体制、那覇の琉球气象台は米軍嘉手納の気象隊の管轄。石垣とか離島 4 箇所の測候所は中央气象台の管轄下にあつたから、比嘉所長は昭和



石垣島測候所 55 周年記念、八重山民政管府長の家族の見学時撮影。当時の職員、前列左より 2 人目が比嘉所長。(1951 年)

21 年に石垣に来たのは中央気象台の転属命令で、だから正式な名称は、戦前と同じ「中央気象台附属石垣島測候所長」だったはずです。これは僕の推測ですが、彼が尖閣に測候所造りたいと考えていたのは、中央気象台の管轄下にある、この計画は元々はそこから出ているし、金も持っている。何よりも「魚釣島方面気象機関要は益々重大と相成べく本台としても明後年に於いて之が予算獲得に努力致す予定」とあったでしょう。もう戦争も終わっているから。中央気象台の管轄下にある間に造りたい、造れると考えていたんじゃないか。昭和 27 年 4 月にサンフランシスコ講和条約が結ばれますねえ。それを契機に気象業務は全部、琉球政府の管轄下に入る。ところが琉球政府は金がない、それで具志台長の奮闘が始まるわけですが。比嘉所長の尖閣と与那国に造る目論見が外れてしまう。その翌年昭和 28 年には石垣測候所を去るわけです。彼はすぐ気象庁に行けたはずだが、行かないで、鹿児島島の台長に転勤します。そのあと本庁の海洋部長までやったと聞きました。

中央気象台時代 凌風丸で 石垣島 東京文化圏？

— 中央気象台時代は、気象台の職員は給料が多くて、羽振りもよかったんですね。琉球政府に移管されたら、一変して、待遇も悪くなったわけですか（笑い）。

正木：さっき話したように測候所の給料は八重山支庁長よりも、石垣の町長よりも、ずっと小使いさんの方が給料多かったです。それで平和食堂という料亭があって、測候所の連中は皆ここに通う。他の官庁と違って羽振りがいい。お蔭で、僕らが八重山の料亭に入っても、測候所と云ったら、もう大変歓迎されましたよ。測候所に採用さ



中央気象台観測船「凌風丸」が年 4,5 回寄航した。気象観測資材・職員の給料の他、東京の文物・文化を齎した。

れたのは昭和 29 年、琉球政府に移管されて 2 年後ですから、中央気象台時代にはどんなに羽振りがよかったかは、これからも想像つきますでしょう（笑い）。あの時は凌風丸が石垣に廻ってくるわけです。年に 4,5 回給料持ってくる。雑誌とか、新聞とか、いろんな文化文物が、凌風丸が直接東京から持ってくる。那覇に入ってこない時期に、だから八重山文化は、東京の文化でしたよ。あの木下順二のシナリオがありますねえ、夕鶴の劇、あの本がたまたま凌風丸が持ってきたんでしょう。世界書房の本屋に売っていた。僕らの先生が買って、昭和 27 年八重山高校 5 周年記念にやろうと上演した。比嘉所長の娘の典子さん、彼女は 1 年先輩で与ひょうの役、つうが女性だから抱くところがあるので女生徒が与ひょうの役しました。僕は運ずの役しましたよ。あれが日本で最初の上演ではないかなあ（笑い）。

そのあと琉球政府に移管されたら、給料も安くなり、これでは生活できないと、悲鳴上げて、それで退職騒ぎも起きましたよ。これが当時の新聞です。「希望を失った測候所所員続々辞表提出 戦前戦後を通じて待遇では別世界にあって人々にうらやまれた石垣島測候

所が四月以降中央政府の統轄下に入って千円乃至千五百円の減俸となり・・・薄給ではやりきれない・・・若い所員らが辞職したり辞表を提出したり辞意をもらしているのが続々出憂慮されている」(八重山毎日新聞 1952.09.23)とあります。その時、相当の人が辞めた。上里直前さんとか、神山さんとか、喜友名さんとかもそうですよ(笑い)。

復帰前 無人氣象観測所 魚釣島に 設置要望

— 結局、これも琉球政府は金がないということで、お流れになるわけですねえ。その尖閣諸島一帯に石油がでるかもということで、中国、台湾が領有権を主張し、領土問題化して、1970年ですか、琉球政府から、今度は無人観測所を設置するよう要望が出ます。

正木：そうですね、これが当時の新聞記事ですか。1970年9月だから、復帰2年前ですねえ。「尖閣列島が沖縄の一部であることを事実上、明白に示すため同列島の魚釣島に無人の気象観測施所を設置する方針で本土政府に対し明年度の援助に組み入れるようすでに折衝を行っている。」(琉球新報 1970.09.13)とあります。12月には、「尖閣列島の無人氣象台設置費は総額3千7百95万2千円で来年早々設ける」(琉球新報 1970.12.19)とありますが、実際造られていませんねえ。この予算は計上されたというのにどうしたのかなあ。この辺の経緯は分かりません。気象庁でも、復帰前に尖閣調査したんだという話は出てました。復帰前というから、丁度70年のその頃ですかねえ。沖縄気象台の小野俊行台長が、本庁の業務課長やっていた頃、調査で飛んだことがあると言ってましたねえ。飛行機で調査したはずですよ。

復帰後の1978年沖縄開発庁が尖閣諸島を本格的に調査してますねえ。やっぱり沖縄側の要望が強いもんだから、漁港施設、無人灯台と一緒に無人氣象観測施設をどこに造った方がいいかと調査してます。

設置候補地として魚釣島の2地点、確か北西斜面の平坦開豁地のうち、海拔10メートル以上の所か、北東岸の灯台の候補地とした岩山をあげていますよ。結局これも立ち消えになりました。思い切ってあの時造っておけばよかったはずだが。



魚釣島東灯台と無人氣象観測施設候補地。(沖縄開発庁 1979)

与那国設置計画 戦争で頓挫 所長 父に予定

— 話は元に戻りますが、戦時中の測候所を造る計画、尖閣諸島の場合は戦争で立ち消えになったんですが、与那国にも造る計画があったこと、初めて知りました。

正木：尖閣列島だけじゃない、与那国にも造る計画でした。あそこも尖閣と同じ台湾坊主や台風とかの観測拠点として重要な位置にあるから、ぜひとも造らんといかんです。

それで、与那国用の資材は那覇まで送られてきてました。庁舎を造るコンクリートとか、

木材なんかも、那覇港で皆 10・10 空襲で焼けた。私の父の手紙では、父は高等講習を終わって、人事課長から与那国測候所所長で行くことになっていた。それで門司から台湾廻りの高千穂丸に乗って、台湾行く途中にアジノコート沖でやられたわけです。台湾廻りしたのは台湾に母の兄弟がいて私的な用事があった。またもう 1 つは、帰りは台湾から漁船で与那国に渡って、与那国を見る予定だったんです。その前に与那国の郵便局に囑託を置いて、観測をして、八重山に気象データーを電報で送っていたんです。東京での研修前にも測候所を造る準備で石垣測候所の喜多豊一所長と 2 人で与那国に行っているんです。その北さんの後任が大和順一所長です。喜多さんは東京に帰られて、父に会った時、与那国であんた頑張れと言われて、そのために台湾まで来たわけです。台湾から与那国に渡って、測候所造りの下見か、準備する積もりだったはずですが、10・10 空襲で資材もやられたので、与那国測候所は立ち消えになったわけです。戦時中は職員が派遣されて、石垣から出張して、郵便局の庁舎借りて、気象観測をしていた。2 人位ですねえ。その時の業務日誌があるはずなんです。一生懸命探すんだけど探せきれないなあ。八重山にあると思うんですよ。で、与那国測候所は、1953 年に建てられました。僕はそこに自分で希望して赴任しました。

父の遺志継いで 与那国へ 国境の島に驚く

— お父さんがお元気ならば、与那国測候所の所長として頑張っておられたはずですが。そういう経緯もあって、譲さんはお父さんの遺志を継いで希望して赴任されたんですね。

正木: そうです、父は志半ばで亡くなった。父の遺志を継いで、与那国を希望して行った。希望して 7 年おって、転勤してきて 6 年おって、復帰の前 1969 年末にまた行った。

その時は所長でした。所長になれと言ったら、僕はそこの所長よりも与那国の空港出張所、航空観測をしたくて、航空気象をやりたいなあと思って、与那国の所長なら行かん。空港出張所所長にしてくれと言った。辞令もらったらそれが測候所所長になっていた（笑い）。2 回目所長で行った時は 37 歳で、結局は親父が死んだ歳と同じです。だから僕は与那国に通算 11 年おって、その間で経験したことは沢山ありますねえ。

海の経験、突き船でしょう。カツオ船でしょう。それからクリ舟、クリ舟で、勿論エンジン付きに 2 人乗って、シイラ釣ったり、カツオ釣ったり、曳き縄で、掛かるとそれを揚げて、大漁しましたよ。

最初に行ったのは 22 歳(1956 年)、それから 30 歳(1964 年)なるまでおったから、足掛け 8 年間与那国。そのあと石垣に転勤しましたが、あの時は台湾海峡の紛争があって、大変な時期でした。もう与那国も戦争状態ですよ。与那国上空まで戦闘機が飛ぶし、台湾が見える与那国の目の前は、アメリカの軍艦がいるわ



赴任当時の与那国測候所。現在は閉鎖されてない。

けです（笑い）。

アメリカ第七艦隊 目の前で 爆撃機離発着

— 台湾海峡紛争の時、大陸、台湾側の気象情報も入らんから、予報外れたら、漁師も遭難の危険もあるし、与那国測候所で予報する正木さん達も命懸けだったわけですねえ。

正木：あの台湾海峡紛争の時、アメリカの第七艦隊が与那国と台湾の間にいるわけですよ。すごい軍艦が、戦艦とか、集結しているわけ。すぐ目の前に見えるもんだから、びっくりしました。あのエンタープライズという航空母艦、あれも与那国のすぐそこに停泊している。航空母艦というのは、こう前から見ると、こんなにV字形に見えて。こんな大きな航空母艦がいるんだなあと思って。あの時、第七艦隊が来たのは、大陸から金門島や馬祖に連日砲撃してくるから、何かあったらやろうと、睨みを効かせていたわけなんですねえ。で、航空母艦から朝 8 時になると、もうきっかり飛行機がワァーと飛び上がるんです。飛び上がって、台湾の東海岸をグルグルグルグル、何機も、10 機も、20 機も。それが測候所の上を通過って、戦争みたいに（笑い）。

だから大変な光景。それが 8 時にやって、5 時になったら、間違いなく着艦するわけです。アメリカという所は戦争の時でも、労働時間というのはあるんだなあ（笑い）。8 時から 5 時までは間違いなく、時計みたいでしたよ。1 週間位続いたかなあ、まだ続いたかもしれません。あの時、何で与那国の上空まで飛ぶかと思っていた。そしたら、そのあとでも、台湾の東経 123 度までは、台湾の領域、領空なんですよ。東経 123 度というのは与那国の真上を通るんです。丁度中央ウラブ岳という山がありますが、その辺が 123 度の線です。ナンタ港から、そこから向こうは台湾の領域、こっちは日本の領域ですよ（笑い）。だから南西航空（現 JTA）とあったでしょう。

で、復帰後、これが飛んで来て、何する時は、台湾の許可を得るんです。飛行場は台湾の領空にありますから、台湾にちゃんと連絡してから来るんですよ（笑い）。歪な空の国境です。



第七艦隊、沖縄行き報じる新聞（沖縄タイムス 1958.8.28）

下：空母エンタープライズ



気象資料出さない 誤った天気予報 漁師 あわや遭難

— その台湾海峡紛争の時ですか、天気予報に大変苦労したと聞きましたが。

正木：そうです、金門・馬祖の砲撃で、中共と台湾の蒋介石が戦争しているわけですよえ。そしたら、両方とも、中国大陆も、台湾も気象資料を出さないんですよ。管制してもう

出さない、気象情報は極秘情報だから。戦争中に日本も出していませんから。

で、あの当時入ってきたのは香港です。香港はあの当時はイギリスの統治領でしょう。だから香港だけは入ってくるんです。だけど実際台湾側の情報がないから、その部分が空白な天気図です（笑い）、それはどの位の期間だったか、忘れたけど。

それでも与那国で予報しなきゃいかんわけですよ（笑い）。漁師は、天気予報を聞いて漁行くわけだから、必要な情報ですよねぇ、で、予報は僕と課長と2人でやっていたんです、1日おきに。だけど、天気は普通西から変化してくる、西の天気が分からないと、どうにもしょうがない。結局空白な天気図で予報しなければいけない。

それで相当苦労しましたよ（笑い）。漁師から、電話掛かってきて、天気はどうか聞いてくる。聞いたら、前線通過は夕方になるから、天気はいいと言うわけです。言ったら、そうか大丈夫かと、漁場に行くわけですねえ。漁場というのは、西表と与那国の間、ずっと沖ですが、その辺りにハイヌソネといって、そこへ行ったり、メクラゾネといって、また台湾と与那国の間、黒潮の一番激しい所です。その辺りへ行ったり、あっちこっちに行く。そしたら、前線が速くなって昼ごろ北風になって、ビュービュー吹いて、もう大シケ、大荒れになったねぇ（笑い）。天気は急変したもんだから驚くやら慌てるやら、命からがら逃げ帰ってくるわけですよ（笑い）。帰って来たら、もう港に入れない。祖内港は北風が吹いたら入れない。久部良港も北風が吹くと入りにくい。仕方ないから、岬をずっと廻って、島の裏側の山の比川に着けて、そこから怒り狂って電話が来るわけです。

「正木！ お前よくも嘘ついたなあ、ひどい目に遭った！！」「もう少しで死ぬところだった。測候所に待っておけ。お前をモリで突き殺してやるからなあ」と、あの突ん棒のモリがある、あれ持って怒鳴り込んでくるから、逃げないと殺される（笑い）。

天気予報外れたら、もう生きた心地しなかったですよ（笑い）。

漂流ビン調査で 突き船体験

— 漁師にとって天気予報は命に関わる大切な情報ですから、それが外れて、遭難事故起きたら大変、天気予報するのも命懸け、モリ持って殺してやると来たら怖いですよねぇ。

正木：漁師は皆んな気が荒いけど、とくに与那国の漁師はカジキ突き専門だから、とても気が荒い（笑い）。突船に乗って、ほんとに怖いと思った。怖い体験をしたんですよ。

海流調査することになって、漂流ビンを流そうということになって、その頃はビンがなかったもんだから、ビニールの透明な袋にハガキを入れて、上をちゃんと閉じて、海岸では何だからと、船に乗って沖でばら撒いて流すことになった。船に乗るなら、突船乗ろうということで、金剛丸という船にお願いして乗ったんですよ。船長がもうおとなしくて、その当時35,6だったかなあ、前の日にお願いして酒を飲みながら、いろんな話をして、明日の朝、5時に港に来いというから、はいと言って、港行っただけです。そしたらコックとか、船員とかいて、お早うございますと言っても、誰も物言わない、1人も（笑い）。

そのうち船長が来た。来たけど、何の挨拶もしない。こっちが挨拶しても返さない。これ

変なものに乗ってしまった、ヤバイなあと思って（笑い）。船乗って、久部良港出て、目的の漁場に向かうが、誰も一言も物も言わんです。もう気持ち悪くなってきましたよ。

そしたら、太陽が上がってきてから、コックがご飯と言って呼ぶもんだから、皆船の後ろに集まって、船長だけは、あの頃は舵棒だから、手でこんなこんなしながら、皆朝飯食う。そしたら、賑やかになって、皆ワッハッハーして、昨日の話になって、寒冷前線とはどんなものかと、夕べの僕の話の続き、正木先生、正木先生、とまた質問したりして、もうほんと皆和気藹々です。ああいい雰囲気だと思って（笑い）。さっきのは一体何だったのか、不思議がっていました。

カジキ見つけて イキオール 戦場突入

こう和やかにしているうちに、何時間位したかなあ、2、3 時間位で漁場に着いたわけです。目的のハイヌソネという所来たらねえ、皆配置に着くんです。バーと配置に着いて、突き手が 2 人、機関士、それからコックと船長ですから、5 名、これだけいる。僕は船長の傍に、そこはスペースがあるから、空いていたから座っていたんです。そしたら、突き手がカジキ発見したら、「イキオール！」と言うわけです。行きつつあるという意味ですよ。突き手 2 人はモリ構えて、カジキが逃げていく方向を、あっちに「イキオール」、こっちに「イキオール」と大声で指示しながら、追いかけて行くわけ。

もうカジキも死に物狂いで逃げる。あっちこっちに逃げる。波も高いし、その波を掻き分けながら船はフルスピードで舵切りながら追いかけて行くから、もう船はこんなこんな、もう戦場ですよ。僕は「イキオール！」の声聞いた時から、もう胸はワクワクして、カジキ突きはどんなものか、見たいから、立ったり座ったりしていたら、急にカジキが逃げる方向変えると、船も曲げんといかんでしょう。

ギューと舵棒切って曲げた時に、僕に引っかかるわけよ（笑い）。そしたら船長が「このバカ者、邪魔だ！ あっちへ行け！」と蹴っ飛ばしたんです。強く蹴っ飛ばされたもんだから、海に落ちそうになったです。慌てて船の縁を掴まえて、運良く助かった。ああ助かったとホットしていたら、また怒鳴られた（笑い）。「こっち邪魔だ、あっちに上れ！」と、真ん中にカジキ監視の櫓がありますから、あそこを指して、「早く上れ！」と怒鳴るわけです。恐る恐る櫓に上がったら、上はもっと揺れるわけよ（笑い）。右左、上下に。僕は手すりに掴まって、櫓の上からカジキ追いかけて、モリで仕留めるのを見ていたですよ。



カジキ見つけたら、イキオールと追いモリで仕留める。（「オキナワグラフ」より）

突き手 怒って モリ 機関場に投げる

カジキに段々段々近くなるでしょう。そうすると速度を緩めれとか、バックとか、いろいろあるわけです。それを突き手が、手でこうこうしながら機関場に合図やるわけです。そしたらこれを間違えたんでしょな。バックというのを見間違えて、何したんです。そしたら、前の突き手の若いのが、もうあの頃 25 か、30 はならない青年ですよ。これがいきなり回れ右して、怒ってあの突ん棒のモリ、あれを機関場めがけて投げたんです。これがブリッジの壁にバサッと刺さって、ハーセ（感嘆詞 ああ）、この野郎、もしあそこに誰かいたなら、あのモリに突き刺さって死んでいたかも。そう考えるともう背筋が寒くなって、ああ大変な所に来たなあと思いましたよ（笑い）。

その前にはコックがねえ、中学校卒業したばかりの 16,7 位の子供だった。これが竹のバーキ(ザル)に芋を沢山入れてありますよ。カジキを追いかけながら、突き手が大きい声で、エサ撒け、エサ撒けと言ったんでしょな。その少年はこれを抱えて、船縁をこうこう掴まえながら、前の方に回るわけ、ところが船もフルスピードで、ジクザクだし、波もこんなして大揺れですから、転んでしまって、芋をこぼしてしまったんです。船長室の前の所に。そしたら、慌ててこれを拾おうとしてやっていたら、突き棒があるでしょう。船長が「このボンクラ！」と言って、突き棒でパンパン叩くんです。この子は頭から、背中から叩かれながら、泣いてねえ、かわいそうだなあと思った。

カジキ揚げたら 何事もない 元の平常に

またその前か、1 匹のカジキを追っかけている時に、「イキオール」と言って、向こうから台湾船が来たんですよ。台湾船に向かってよ（笑い）。モリを向けて、お前ら、これは俺達のものだ、そこ退けと言って、モリ構えて、ものすごい顔で睨みつけるでしょう。もう台湾船の連中はびっくり、ウワァーと急いで逃げて行った（笑い）。これ見ていたら突き船の漁師は、ほんとに恐ろしいと思ったですよ（笑い）。

ところが、これ終わったあと、もうカジキ突いて、これ揚げで、丁度 200 ㌔位のカジキだったです。こんなでかい奴を突いて、揚げたから、もう帰ろうかということになった。それで何して、丁度昼ご飯時間だということで、またまた後ろに集まるんです。そしたら、さっき突き手が機関場めがけてモリ投げたわけですよ。あの突き手と機関士と関係。また船長が僕を、このバカ者とこんな蹴っ飛ばしたこと。またコックは叩かれたこと。あんなことあったのかなあと思う位、皆吹き飛んで何もないですよ。もう何事も何もない。皆元に戻ってニコニコで



上：カジキ突くモリ。
下：船上での食事光景。
（「記録写真集・与那国」より）

すよ。昼ご飯食べて、あとまた帰るまで、何もない。和気藹々です。またまた僕の気象学の講義を聞いて、また「正木先生、正木先生」してねえ。殺気立っている時にはこのバカ者と蹴っ飛ばされたんですが（笑い）。

いや、海人はほんとにこんなに豹変するのか、人間があんなに一変するのか、不思議だなぁと思いました。だけど、板子一枚下は地獄という位だから、海の上は戦場で、間違えると命落とすし、何事も命懸けの仕事だから、あぁいうサッパリした気質を身に付けるわけですねえ。

カツオ船乗る 同じ体験する

今度はカツオ船に乗ったんですよ。仲嵩さんのカツオ船に乗せてくれとお願いして乗ったんです。タマンカ(玉城)の爺さんも乗っていた。この人はシナ事変で出征した人で、糸満系のベテランの海人です、やっぱり同じだったんです。朝絶対物も言わない（笑い）。

港に出るまでは一言も言わないです。誰も口利かないのは縁起を担いでいるんですかねえ。この爺さんは昔はカツオ釣りの達人だったようです。で、カツオ来たら、ジャコを撒いて、散水やって、皆バンバンバンバン揚げるんです。上手な人はこんなしてパッとやれば、カツオだけ飛んで行って、ダンブルに入る。この爺さんは大判が掛かった。大きなカツオなもんだからもう揚げきれないわけですよ。揚げきれないから、カツオがあっち行ったり、こっち行ったりする。皆並んでいでしょう。傍の青年が、すぐ揚げて、もう1回やろうとしたら、あれに掛かったりするもんだから、怒ってよ。この爺さんを、竿でガンガンガンガン叩いてねえ、もう僕位の若造がですよ。爺さんは、戦争で相当手柄立てた人で、有名な人で、ベテラン漁師、大先輩です。この若造を懲らしめてやろうと思った。ほんと人間じゃないと思ったです。ところが、これまた帰りは、全く何もない（笑い）。

爺さんも、あの若造も、和気藹々して、ほんとに皆何もなかったです。全然何もない。もうサッパリして、後腐れもない（笑い）。

やっぱり海人は、海人しか分らない、不思議な世界だなぁと思いました。

カツオ釣りは海が盛り上がるというけど、ほんとに盛り上がりますよ。こうダァーとねえ、まァ上からはカツオドリ、鳥がバンバンやるし、どんどん揚がるし、カツオドリはジャコを食べに来るわけだから、すごいですよ。ほんとに戦場です。とにかく何分かの勝負です。何分やったかも記憶にないですねえ、こっちも興奮してましたから（笑い）。

与那国 台湾船との闇商売 盛ん

僕は41年間気象やって、いろいろな体験したきたけど、とくに30代に足掛け8年与那国におった時は、普通の人が出来ない体験やってきました。闇商売、あれは復帰前、今は海上保安庁ができてうるさいでしょう。あの頃水上警察というのがありました。与那国辺りに来れないから、島の前に停泊していて、夜船着けて上がって来て、タバコとかと物々交換してましたよ。また与那国の人が台湾に住み付いて、これがハイヌソネとか、あぁいう所で漁

で一緒になると、船停めて、自分は与那国の何という家の何々という。お盆だからこれ持つていってくれと。お米とか、お菓子と託するわけです（笑い）。

僕もたまたまクリ舟で行って、釣りしていたら、台湾船が停まっておったから、行って着いたら、釣り糸の話をして、この前誰が頼んだのがないかと言って、じゃ次買っておくから、何月の何日に来て、また海上で落ち合って渡すからと言付けを頼まれて、そういうことを、復帰前は堂々とやってましたねえ。

また、僕が所長している頃に、島の東の方の浜に、ウドウブヤマという浜があるんですよ。そこでキャンプをしようということで、皆で、役割分担して、陸上班はオートバイで行って、食料持っていく。テントなんか大きいから、クリ舟に積んで、それに3名乗って行ったわけです。ナンタ港出て、しばらく行



与那国沖を航行する台湾船、漁船か、闇船か？
（吉浜貞一.1970）

ったら、台湾漁船がいましたよ。あそこ行って魚もらって来ようと僕が言ったから、若い所員の1人が、所長、台湾漁船に着いたら琉球政府の公務員、懲戒免職になりますよ、ばれたらどうしますか？ ばれたらお前が辞めればいいさあ（笑い）。構わん、着けろと、着けたら、日本製の衣類は大変魅力があるわけ。僕らが着けている作業着指して、これくれ。いや、これは役所の備品だからできない（笑い）、これ脱いで、中のランニング脱いで、はいとやったら、沢山魚くれるし、ボンカン酒もこんなにもらってねえ。西表の仲の神島でもオオミズナギドリ調査に行った時もやりました、あの時は台湾人と兄弟になった（笑い）。ほんといい時代だったですねえ。

黒潮のもたらす影響 沿岸国の共同調査(C.S.K)で解明

— 30歳で、一旦与那国から石垣測候所に戻りますねえ。そのあと、今度は黒潮調査で、先島から、台湾、尖閣諸島、東シナ海の黒潮調査されたと聞きましたが、

正木：黒潮は北赤道海流と言うんですが、その源はフィリピンの東方沖あたりで、フィリピンにぶつかって、1つの流れが分れて、北上して来るわけです。バーシー海峡を超えて台湾の東側から、与那国をまともに洗って、東シナ海に入ります。そしたら真直ぐに北に来て、尖閣にぶつかるんです、大陸棚に。大陸棚にぶつかるから、こう曲って向きを北東に変え、深い沖縄トラフを通して、そこからトカラ海峡を抜けて九州南に行くわけです。大陸棚から溢れて行く海水が、飛行機から見えますよ。那覇から台湾に飛んで行く時に、尖閣の上を飛ぶんです。1万メートル上空から見たら、黒潮が大陸棚の崖っぷちにぶつかり、海面が盛り上がり、大陸棚いっぱい溢れて、黒潮が流れて来るのが分ります（笑い）。大陸棚にぶつかって軸がこう曲がって、流れて行くのがはっきり分ります。

この黒潮は、南から北へ、毎秒約3500万トンの水を運んでいるわけです。世界最大といわ

れるアマゾン河の流量でも黒潮の 300 分の 1 の流量しかない。これだけ莫大な熱エネルギーをもたらしますから、黒潮は日本列島だけでなく、東アジアの全体の気候に大きな影響を与えているわけです。あの尖閣近海で急速に発達する低気圧、台湾坊主もこの黒潮の熱エネルギーが元になって発生します。この黒潮を国際黒潮共同調査(C.S.K : Co-operative Study of the Kuroshio) といって、沿岸国で共同調査しました。

日本、台湾、韓国、フィリッピン、アメリカ、ソ連などの 9 カ国が参加して、期間は 1965 年から 67 年まで。毎年夏と冬に調査して、黒潮が気象とか、漁業とかに及ぼす影響とかを調べるわけです。この C.S.K の予備調査、東シナ海の黒潮共同調査で行きました。

長風丸 尖閣通って 華東ラインまで 東シナ海調査

ー C.S.K の黒潮共同調査、これの予備調査で行ったわけですねえ。黒潮は、東シナ海に入ったら、大陸棚にぶつかって北上しますから、尖閣諸島近くも調査したんですねえ。

正木：長崎海洋気象台の長風丸という船で、竣工したばかりの最新式の観測機器を備えた観測船ですよ。これに乗って、1965 年 7 月から 8 月にかけて 20 日間ほど調査しました。

長崎から山形忠和団長以下 9 名、沖縄からは、伊志嶺さんと長田正さんと私の 3 名が参加しました。宮古、八重山、石垣、与那国、台湾付近を通って、大陸棚に上がって、尖閣列島の傍通って、黒潮調査をしました。C.S.K 国際黒潮調査というのは、気象の共同調査でもあるわけですよ。台湾も、韓国も、フィリッピンも、皆調査船をそこに貼り付けて調査しますが、気象の変化の調査、台湾坊主の発生する過程、東シナ海の低気圧のでき方、そういったものを観測するわけです。大陸棚に上がって、尖閣の目の前を、南小島の傍を通ったし、そこからずっと上行きました。そしたら中国の華東ラインというのがあった。あそこに入ったら拿捕されるから、あの中に入らんで、ラインに沿ってずっと揚子江の入口付近まで行きました。で、その北側に李承晩ラインがある。長風丸はあそこは行かんで、引き返して、そこから那覇に帰って来ました。華東ライン、李ラインとか、あれなんか軍事境界ですよ。台湾の側通る時もありました。台湾に船から電報打つんです。そしたらすぐ軍用機が飛んで来ました。飛行機が来て見て許可する。台湾の境界は東経 123 度、与那国の上空でした。与那国行きの飛行機は台湾と協約を結んでいたはずですよ。与那国空港は台湾



上：東シナ海の黒潮の流れ模式図

下：長崎海洋気象台観測船・長風丸（265トン）

の領空にありましたが、今はどうなっていますかねえ。

尖閣初めて見て 感激 長風丸でも 傍通る

— 長風丸でどのような海流調査をしたんですか。

正木：水温も深い所、100 メーター、200 メーター、300 メーター、ああいう深い所のものも調べますし、海流も調べます。海流計があって、それでやったりするんですが、何ノットで、どこに流れているとか。黒潮の流軸が大陸棚にぶつかりますと、尖閣列島の所からこう右へ走るんです。一部は表面の部分は上がっていきます。大陸棚に上がって北上するんだけど、中国大陸近くの華東ラインの所では、揚子江から流れてくる冷たいのがある。その境を、大陸棚は200 メーターですから、10 メーター落ちたか、5 メーター落ちたか、温度をずっと測りながら、海流を調べながら、海水の比重、比重というより塩分濃度、それとプランクトンも、プランクトンは簡単で、後ろから網を曳いて、この観測点からこの観測点の間を曳いて、揚げて、どの位いるんだと調べました。そしたら尖閣付近で、熱帯低気圧の接近です。

もう大シケでどうにもならないから、どこに避難するか、那覇に帰ると言うから、那覇に帰らないで、船浮は安全だから、そこに入れようと言って、伊志嶺さんがアドバイスしたんですよ。それで3 日か4 日間位は、西表の船浮に避難しました。その時は大変でした。皆船酔いで、僕は当番に就いたから船酔いしている暇なくて（笑い）。もう大シケの中で観測しました。

でもこの共同調査は随分勉強になりました。それに初めて尖閣列島見ました。魚釣島も目の前ですよ。

ああ、父が上がった島があれなんだなあ感激しましたねえ。船のデッキからもうしばらく眺めてました。いつかは自分も島に上がってみたいと思いましたねえ。そのあと舞鶴の海洋気象台の清風丸に20 日間乗りましたが、この時も尖閣の近くを通りました。



観測メンバー。前列中央は伊志嶺安進。
左隣は長田正、その上は正木謙。

清風丸 沖縄トラフで 熱鉱床発見

— 舞鶴の海洋気象台の清風丸の場合は、何の調査で尖閣近くまで行ったんですか？

正木：その時も伊志嶺さんと僕と長田だったかなあ、3 名だなあ、1966 年か67 年、那覇から清風丸に乗って、その時の観測は海洋観測じゃない。海洋底拡大説というのがあった。海洋の地殻がこう沈み込んでいく。プレートが沈み込んで他を押し上げていく。今は常識になったテレビでもやりよるでしょう。その説が出たのが1900 何年位かなあ、どうもこれは確からしいと見直されて、あれの検証ですよ。フィリピン海の海洋底(プレート)が琉球海溝に沈み込んでいく過程を検証するための観測でした。沖縄本島の東海上から琉球海溝沿いに台湾東岸まで南下しました。そして台湾と与那国島の間から東シナ海に入り、尖閣列島を通

って大陸棚百尋線に沿って、沖縄トラフ（舟状海盆）の調査をして、那覇に帰ってきました。海底の地殻熱流量や地磁気、エアガンによる海底の地形、地質図の作成、ピストンコア・サンプラーによる大洋底の堆積物の採集などしました。

海底の熱流量は、電極を入れて測定器を海底まで下ろして行って、その変化で熱量を計り、それを温度に換算して、海底温度を観測するわけです。琉球海溝の所にフィリピン海プレートが潜り込んで行く所では、海底は温度が低いだろうと言うんで、実際に観測したら、もうその通りですよ（笑い）。ずっと大東辺りから温度を測ってきて、琉球海溝の海底の所まで来ると冷たくなってくるわけです。冷たいんですよ。マグマが湧き上がる所では、例えば沖縄トラフ、すぐ東シナ海です、舟状海盆とも言いますが、久米島の西の辺り、底がこう裂けているわけです。琉球列島はこっち(右)側にこう傾いています。そこやったら、海底の温度が全く違ってました。で、その観測したデータくれと言ったら、いや、これはまだ公表してないからくれなかった（笑い）。今チムニーというんですか、熱鉱床が発見されて注目されていますが、あの時から分っていたわけですよ（笑い）。この長風丸も尖閣のすぐ傍通って何しました。那覇から慶良間見るみたい見えましたが。これで尖閣の傍通るのは2回目、もうボートでもあれば漕いで行って、独りで上陸しようと思ったですよ。だけどそんなことはできないし（笑い）。



伊平屋島沖の海底熱水鉱床。「しんかい 6500」で、2008年に撮影。（「後藤中徳サイト」より）

3度目の正直 憧れの高良先生と 調査団一員で上陸

ー 1968年の高良鉄夫先生の第5次調査、沖縄問題懇話会の高岡大輔さんを団長とした尖閣列島学術調査団に参加されて、3度目に、上陸を果たしたわけですね（笑い）。

正木：ほんとに3度目の正直でした。お蔭で魚釣島と南小島に上陸することができた。あれは大陸棚の石油資源の調査が目的で、その予備調査です。琉球政府は高良先生に案内してもらって、元国会議員の高岡先生が行かれるわ



石垣港から尖閣に向かう前の記念写真撮影。前列帽子手にしているが高良鉄夫先生。右隣高岡大輔団長。（兼島清 1968）

けだから、向こうに台湾漁船が沢山いて、物騒と思ったんでしょう。高岡先生に何かあったらいかんからと、八重山警察署は武装した警官 2 人を、平良繁治さんと伊良波幸勇さんにカービン銃持たして護衛付けて、一緒に行きました（笑い）。その時尖閣行ったのは全部で 14 名位かなあ。

私は北村所長の命令だった。誰か海洋観測に行く人いないか、若い人いないかと言うから。はい、僕が行きますと、すぐ、手を挙げて（笑い）。

それで、また伊志嶺さんと一緒になった。結局伊志嶺さんの補助として海洋観測で行ったわけです。憧れの高良鉄夫先生と一緒に行くわけだから、もう大変嬉しかったですよ。

して、琉球水産研究所の観測船図南丸で石垣港から出航して、夜が明けたら魚釣島が目の前でした。琉大の真栄城守定さんと北岡甲子郎先生は、島に近づくと、飛び込んで、泳いで渡った。7 月で暑かったから、2 人とも若くて活発で、とても元気がありましたねえ。伊志嶺さんと私は、図南丸に居残って、これから海洋観測です（笑い）。観測がなければ、私も泳いで渡ってみたいと思いました。泊地の潮流や水温の定時観測をしなければならない。どうせ上陸はできないだろうと、仕方なくエクマンメルツ流速計などの準備し



図南丸からボートで、次々魚釣島に上陸していく。僕も 3 度目の正直で上陸することができた。（兼島清 1968）

てました。「憧れ」を目の前にして、これほど悔しいことはなかった。上司の伊志嶺さんが、「この図南丸は、まもなく沖へ移動するというから、観測は中止する。次のボートで君も上陸しなさい」と言われた。伊志嶺さんが仏様に見えたですよ。ほんとうに嬉しかった。

カツオ工場跡 水溜めに佇む 父も 29 年前に

— 伊志嶺さんの戦前の上司は正木任さん。お父さんからいろいろ教えを受けたわけですから、譲さんの気持ちを汲んで、上陸を上陸許可して下さって、よかったですねえ。

正木：最終のボートで、堀割りのある所から、魚釣島に上陸した。僕は真っ先に父が野営をしていたという古賀さんのカツオ工場の跡へ急いだ、伊志嶺さんと一緒に行きました。父の写真で見ていた水溜めがあったです。父は尖閣来たのは昭和 14 年。僕が来たのは昭和 43 年。29 年前に、父はこの水溜めの前に立っていたんだ。父の姿を想像しながら、水溜めの側で手を合わせて感慨に耽りました。その時父は 32 歳、僕も 32 歳、考えてみると父と同じ歳です。不思議な巡り合わせと思いましたねえ（笑い）。

そのあと、伊志嶺さんと分かれて、憧れの高良鉄夫先生の後から付いて行った。カバン持ちして、一緒に魚釣島を廻りました。先生の胴乱か何かをかついで、荷物を持って、琉大の化学の兼島清先生、あの先生は水質調査で来てました。最初は 3 人一緒に廻りました。兼島

先生はちょっとした流れがあると立ち止まって、あっちこっち水をビンに入れて、水を採取していました。僕は水に興味ないもんだから、どんどん先行った。そしたら兼島先生は遅れて、はぐれて、あとはそのまま引き返したんじゃないかなあ。

高良先生と僕と2人はずっと北側の海岸沿いを歩いて、東端まで来て、そこ曲がって、島の南側まで行ったんです。そしたら険しい断崖が迫って、これから先は危ないから、もう行くのはよそうと言って引き返しました。あとで地図みたら、相当な距離歩いたとびっくりしました。もうその間、高良先生から、島の地形を眺めながら、こっちの砂岩は何々とか、向こうの断崖は何々だとか、魚釣島の地質の話をいろいろしてもらった（笑い）。すごい勉強になったです。



昭和14年に撮った水溜めの写真。そのまま残っていた。この前に、父が佇んでいた姿を想像して手を合わせた。

南小島 平坦地 穴ぼこだらけ ヘリポート造れる

— そのあと南小島に上陸したわけですねえ。

正木：巡査の平良さんと伊良波さんは台湾漁船へ向かうときもカービン銃をさげて舳先に立っていましたねえ。停泊した船に近づくと、こちらは日本領土だから出て行け！ 魚をとってはいかん！と大声で警告していました。南小島へ上がると、座礁したタンカーがでんと聳えて、大きなホテルが建った位に見えましたねえ。その近くの海岸には、台湾人が仮小屋を建てて、この座礁した船を解体して、スクラップを採っていた。台湾人皆若いから年配の人から、沢山いた覚えがあります。僕はすぐそこから岩山に向かいました。琉球政府の新城鉄太郎さんなんか、台湾人が違法入域、不法上陸したことを厳しくとがめていました。「日本の領土だから出て行け」と言う平良さんの声も聞こえてました。

南小島にタッチー(尖塔)の岩山が2つあるでしょう。僕はすぐ南側の1つに登りましたよ。小さい方に。そしてそこ下りて、島の平坦な所をずっと歩き回りました。

殆ど土はなくて隆起サンゴ礁の平坦な岩、草が少しは生えていてました。よく見ると、所々にポコン、ポコンと穴があいて



南小島の東側の岩山と尖塔、裾野は平坦なサンゴ礁が広がり、ヘリポート建設が可能？（新納義馬 1979）

いる。もう歩きにくてですよ。甌穴の穴ぼこ、甌穴があっちこっちにもう、中見たら石が入っているもんだから、これ甌穴だと分ったんです。潮が満ちてとか、台風の時とか、あるいはそれ以前は潮の高い時期がありますから、もしかすると昔は浅い海だったかもしれん。甌穴ができてもおかしくない。で、ここ歩いて、南小島は飛行場は無理だが、これだけの平坦な地があるから、ヘリポート位なら造れそうだと思います。しばらくしたら出航すると呼ぶもんだから、すぐ皆がいる所に引き返しました。僕が上陸したのは魚釣島と南小島です。北小島と黄尾嶼(久場島)は船から眺めただけ。黄尾嶼は米軍の爆撃演習地だったから上陸はできなかった。最後に黄尾嶼を見てから、帰って来ました。赤尾嶼(大正島)ですか、あそこは行かなかったです。

尖閣で起こる地震 特徴がある

— 最後になりますが、尖閣諸島辺りで起こる地震、1947年の石垣島を襲った地震、伊志嶺さんが震源地を特定して尖閣辺りじゃないかといった地震、尖閣で起こる地震は特徴があるとお聞きしましたが、あるわけですか？

正木：ありますよ。地震の顔です。これ僕の調査でやったんですが、当時気象庁はあんまり地震やってないもんだから、台湾の気象台が出してある資料を、台湾からウチの気象台長が、復帰前行って、台湾からもらってきたんです。地震速報みたいな、こんな沢山、箱のいっぱいもらってきたんです。これで震源を皆照らし合わせて、石垣の記録と照らし合わせてやってみたら、震源が決まるわけですよ。で、その時の地震の記録を調べてみると、宜蘭沖の地震、宜蘭からこの列島弧に沿って来るような波、花蓮港沖から南東、南西方から来るもの、そんな顔があるんです。それから尖閣列島近くの舟状海盆、沖縄トラフですねえ、裂けて、沖縄トラフから来る地震、それから南東沖の地震、明和津波を起こした地震、それについてあまり資料がないから発表しなかったんですが、顔があるんです。初期微動という一番最初に入ってくる波をP波が入ってきて、S波がこう入ってくるんです。その形が全然違うんです。顔があるんですよ。だから早く地震起こってくれんかなあと思って（笑い）。尖閣の場合は、深発ですから、深い地震、下から突き上げるような地震がくるんです。P波がバーと大きくなって、S波が入ってきても、P波とそんなに変わらない位の大きさです。面白いですよ。今はそういう定性的な調査というのはあまり持てはやされない。だから僕らが発表しても、興味をもってくれる人もあまりいなかったです。定量的にやらないと科学じゃないとの見方、僕らのように定性的なものをやるとダメなんです（笑い）。全体の特徴見るとマクロに捉える視点も必要だと思いますがねえ。だけど、今は地震計の記録も見えないですよ。昔は針がこう動いているのを見えたんだけど、今は皆どこに何があるか分からない、皆数値化されて本庁に行ってしまうから、そんな研究もできなくなった（笑い）。いつか機会があれば、まとめてみたいですねえ。

— 長時間のお話、とても勉強になりました。有難うございました。（了）



上段左：魚釣島を視察する高岡大輔氏（八重山毎日 1968.7.11）右：次の目的地北小島に向かう（季刊沖縄）下段左：南小島の上空を舞う海鳥（大城盛俊）右：不法操業の台湾漁船（松田賀勝）。



尖閣諸島調査(1968年7月)の思い出を37年ぶりに語る集いにて（2005年11月）
 右より 新城鐵太郎（琉球政府総務局渉外課長）(86)・高良鉄夫（琉球大学農学部部長）(93)・
 伊志嶺安進（琉球政府気象庁海洋係長）(82)・正木譲（八重山気象台観測係長）(71)。
 なお（ ）は調査時の役職、年齢は2005年時点。

※「尖閣研究 尖閣諸島海域の漁業に関する調査報告
—沖縄県漁業関係者に対する聞き取り調査— 2014 年」(2015 年刊)
「5 章 尖閣諸島調査関連等」より転載しました。